24　「の」─中世の擬古物語

21年度　立命館大学

★　次の文章を読んで、問いに答えよ。

　（入水に失敗し小野の里の尼君のもとに身を隠していた浮舟を、弟の小君が薫からの手紙を携えて、訪ねてきた。）

　かしこには、例のまぎるる方なくながめ給ふ程なるに、あなたより人来て、尼君に「かく」などささめき聞こゆれば、思ひかけぬ程にもと驚き給ひて、「なほ、みづから聞こえ①給へ。ことごとしかるべき人にもおはせざめるを。さのみ出だしはなち聞こえ給ひて、いかにものしと思すらむ」と、いとほしがりて、「あさましく、見るめにあかぬ御つれなさなりや」と、口々に言ふも、いと苦しと思したり。まことには、例の、「こなたに」と言はせたれば、歩み出でて、の端つ方についゐたり。尼君ゐざり出でて、「たびたびかく山道分け②給ふ、御しるしなくてやと、古めかしきさし過ぎ心、とりどりかたはらいたく思ひ聞こえ侍り。いかなるにか、誰にも見え知られ給はむことをわづらはしく思しためれば、見奉りわづらひ侍る」と③のたまへば、「このたび定かなる御かへりなくては、かへり参るまじくなむ承り侍りつる」と言ふさまも、㋐いとらうたげなり。

　尼君、まめやかに聞こえ知らせて、しどけなげなるを引き直しなどし給ふ。なほいとつつましけれど、我が心にも、げにかくまでたづね給ふ程にては、つひに隠れなくて、母君聞き給ひなば、「我にかばかり隔てけり」と思ひ④給はむもいと苦しきに、㋑さなからむ先にほのめかしてばや、と思ふ折々あれば、ただ我にもあらでゐ給へり。

　「さらば、ここにも」とて、少将の尼、導き入れて、人々はすべり隠れぬれば、㋒いとうれしくて、まづ御文さし置きて、見聞こゆ。いとささやかにをかしげなるさま、昔ながらの面影㋓つゆばかりたがはぬものから、御髪などの、ありしにもあらぬを見るに、夢かなにぞと悲しくて、よよと泣きゐたり。姫君も、うち忘れつる昔のことども今さら思し出でられて、まづ母君の行くへ問はまほしけれど、うち出で給ふべき言の葉もおぼえず。

　とばかりためらひ給ひて、「さても、世になき者となりにしを、誰も誰もさこそは思ひ給ひけめ。せめて憂き身の契りにや、思ひのほかに長らへて、あらぬ世の心地してこそ明かし暮らしつれ。おのづから心地もしづまるに添へて、まづ母君の御ことなむ、おぼつかなく悲しき」と、のたまひもやらぬに、いと悲しくて、「おはしまさずなりにし後は、その御嘆きに心も違ひ、あやふく見え給ひしを、大将殿よりさまざま慰め給ひて、『まろなどまでも、いとほしくせさせ給ふ御心ざしのかたじけなさに慰めて、かけとどめたり』とこそ、常にのたまふめれ。されど、なほけて、ありし人にもあらずぞ見え給ふ。かく聞き奉りしをり、やがても聞こえまほしくおぼえしを、大将殿『しばしは人に漏らすな』と、かへすがへすのたまひしかば、え聞こえ侍らぬ」など、幼げに言ひゐたり。「それなむ、いと口惜しき。かけても知られ奉らじと思ふを、いかにして聞き給ひけるにかと心憂きに、あらざりけるさまにも聞こえなしてよ」とのたまへば、いと難しと思へり。「ただ、㋔かく憂きさまにても、母君に今一度会ひ見奉らむと思ふ。これを忍びて伝へてよ」とて、几帳のそばより文を取り出でて、さし置き給へば、懐に引き入れて、「ありつる御かへりなくては、いかにのたまはせむ。ただ一くだりにてもたまはりて、かへり侍らむ」と言へば、「いとうたて、年月の程に思ひかはり給ひにけり。かくばかり憂き名を、あらぬさまに言ひなして、もて隠さむとは思ひ給はずや」と恨みられて、しひてもえ言はず、伏し目なり。さしも言少なに、心もとなき御本性なれど、幼くより取りわき一つにてありし名残りむつましきにや、これにだに思ふこと少し続け給へる、㋕いとあはれなり。

　「今宵いかにしてかへり給はむ」など、例のさし過ぎ人もいとほしがれば、尼君も「げに、いかで。通ひなれぬる人だにも、なほ踏み迷ひぬべき山道のに侍るめるを。今宵ばかりは旅寝し給へかし」と言ひ出だし給へれど、「急ぎ参るべくのたまひつるに、いかが泊まりは侍るべき。月の光にも道たどたどしかるまじくなむ」とて立つを、「さも、およすけて」と、うつくしみあへり。

注　少将の尼＝尼君の弟子。　　　大将殿＝薫。浮舟の恋人。

問１　傍線①の「給へ」、②の「給ふ」、③の「のたまへ」、④の「給は」の敬意の対象は誰か。最も適当なものを、それぞれ次の中から一つ選べ。

１　母君　　２　尼君　　３　少将の尼

４　大将　　５　浮舟　　６　小君

①＝〔　　　〕　　②＝〔　　　〕　　③＝〔　　　〕　　④＝〔　　　〕

問２　傍線㋐の「いとらうたげなり」、傍線㋓の「つゆばかりたがはぬ」を、それぞれ一〇字程度で現代語訳せよ。

　　㋐＝［　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　］

　　㋓＝［　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　］

問３　傍線㋑の「さなからむ先」の説明として、最も適当なものを、次の中から一つ選べ。

１　浮舟がし亡くなりそうだという悲報を少将の尼が聞いて、驚嘆する前

２　浮舟が母君とは距離を置きたいという本音を小君が聞いて、意外に思う前

３　浮舟が小野の里でまだ生きている知らせを母君が聞いて、疎外感を持つ前

４　浮舟が沈みがちで塞ぎ込んでいることを大将が聞いて、過度に心配する前

５　浮舟がようやく小君と面会できたことを尼君が聞いて、胸をなで下ろす前

問４　傍線㋒の「いとうれしくて」は、誰の、どのような気持ちか。最も適当なものを、次の中から一つ選べ。

１　小君が浮舟に会えたばかりか手紙まで直接渡せた場面を見た尼たちの、願いもかなって満足した気持ち

２　そっと部屋から退出する尼たちの浮舟へのさり気ない気遣いを感じた尼君の、ありがたいと思う気持ち

３　作法通りに手紙を置いた小君の所作を見た少将の尼の、きちんとけた成果を実感し、誇らしい気持ち

４　場を和ませようと滑稽なしぐさで退席する尼たちを見た浮舟の、緊張が瞬時にほぐれて安心する気持ち

５　これまで何度も訪ねても会えなかった浮舟とやっと会えた小君の、二人きりになれたことを喜ぶ気持ち

問５　傍線㋔の「かく憂きさま」の説明として、最も適当なものを、次の中から一つ選べ。

１　出家した浮舟の黒髪が短く切りがれていること

２　娘を失った悲しみで母君の心が病み始めていること

３　大将への小君の忠誠心が浮舟に迷惑をかけていること

４　大将の執着心が浮舟には常に重荷となっていること

５　心痛のために浮舟の容姿がひどく衰えていること

問６　傍線㋕の「いとあはれなり」の理由として、最も適当なものを、次の中から一つ選べ。

１　小君の失言を厳しく指摘する浮舟の意外な態度に秘めた強さを感じたから

２　小君との会話を楽しむ浮舟の口調に愛らしさと品の良さが感じられたから

３　ようやく出会えた浮舟になじられてうなだれる小君に哀れさを感じたから

４　普段は口数の少ない浮舟が弟の小君には心を開いていると感じられたから

５　入水しても生き延び弟に会えた浮舟の数奇な運命に仏の加護を感じたから

◎問７　本文の内容に合うものを、次の中から二つ選べ。

１　自分の消息を大将に知られたくない浮舟は、小野の里に自分はいないのだと伝えるように小君に懇願した。

２　浮舟が失踪し行方不明と知った母君は心痛のあまり惚けてしまい、小君には以前と全く別人のように見えた。

３　浮舟を連れて帰るまで戻らぬよう小君は大将に命じられていたが、浮舟の思わぬ強い拒絶に遭ってしまった。

４　浮舟と面会できないのに何度も小野の里に通う小君を、尼君は当初、滑稽で面倒くさい人物だと思っていた。

５　浮舟とよりを戻したい大将は浮舟の所在を口外せぬよう小君に念を押したが、小君は聞こえないふりをした。

６　暗く険しい道をわずに都の大将のもとへ急ぎ戻ろうとする小君の姿に、小野の尼たちは皆心を動かされた。

【解答】

問１　①＝５　②＝６　③＝２　④＝１

問２　㋐＝ＡたいそうＢかわいらしい（10字）

評価の基準　Ａ＝２〔「とても」でも可。〕

　　　　　　Ｂ＝８〔Ｂがなければ全体０。「愛らしい」「可憐だ」でも可。〕

　　　㋓＝Ａ少しもＢ変わらＡない（８字）

評価の基準　Ａ＝７〔Ａがなければ全体０。〕／Ｂ＝３〔「違う」でも可。〕

問３　３

問４　５

問５　１

問６　４

問７　２・６

【現代語訳】

　かのところ（＝小野の里）では、（浮舟は）いつものように心まぎれる手立てもなくもの思いにふけっていらっしゃるところであるが、あちらから人が来て、尼君に「このように（小君がいらした）」など小声で申し上げると、思いがけない時刻であることよと驚きなさって、（浮舟に）「やはり、あなた自身が（小君に）お申し上げになれ。仰々しく（お相手）しなくてはならない人でもいらっしゃらないように思えるよ。そうむやみに中へもお入れせず外へおいでのままになさっては、（小君は）さぞ不愉快だとお思いでしょう」と、気の毒に思って、（他の尼たちが）「あきれてしまう、見た目にふさわしくないご薄情さだこと」と、口々に言うのも、（浮舟は）たいそう苦しいとお思いになっている。実際には、いつものように、「こちらへ」と（取り次ぎの者に）言わせたので、（小君は）歩み出て、簀子の端にかしこまって座った。尼君が座ったまま膝で進み出て、「何度もこのように山道を踏み分けていらっしゃる（のだから）、（いらっしゃるだけの）甲斐がなくていいものか（いや、甲斐なしでお帰しするのは申しわけない）と、古風な出過ぎた心には、あれこれと傍で見ていて苦々しいことと思い申し上げます。（浮舟は）どういうことか、誰にも会って知られなさることを煩わしくお思いになっているようなので、見守り申し上げながら気をもんでいます」とおっしゃると、（小君が）「今回ははっきりしたご返事がなければ、帰ってはならないと（薫大将から）承ってきました」と言う様子も、たいそうかわいらしい。

　尼君は、誠実に（浮舟に）言い聞かせ申し上げて、（小君を入れるために、部屋が）雑然としているのを（元のように）戻したりしなさる。（浮舟は）それでもやはり（小君に会うのに）たいそう気がひけるが、自分でも内心は、（薫大将が）本当にこれほどまで（自分を）お探し求めになる様子では、結局（自分が小野の里でまだ生きていることが）知れ渡って、もし母君がお聞きになってしまったら、（母君が）「（浮舟は）私にこれほど疎外感を持っていたのか」とお思いになるようなこともたいそうつらいので、そうなるような前にそれとなく（自分のことを）知らせてしまいたいものだ、と思う折々もあるので、ただとして座っていらっしゃった。

　「では、こちらへ」と言って、少将の尼が、（小君を浮舟の部屋へ）導き入れて、（周りの）人々はそっと席を外したので、（小君は）たいへん嬉しくて、まず（薫大将からの）お手紙を（浮舟の前に）差し出して、（浮舟の顔を）見申し上げる。たいそう小柄でかわいらしい姿、昔のままの面影は少しも変わらないものの、御髪などが、（長く美しかった）以前とは違って（尼そぎになって）いるのを見ると、（小君は）夢か何かではないかと悲しくて、しゃくり上げて激しく泣きながら座っている。浮舟も、すっかり忘れていた昔のことなどを改めて自然とお思い出しになって、まず母君のその後の様子を問いたいが、言い出しなさる適当な言葉も思い浮かばない。

　しばらく心をお静めになって（浮舟が言う）、「さて、（私は）この世にいない者となってしまったので、誰も皆そのように（私が死んでしまったと）お思いになっただろう。（しかし）つらいことの多い身の宿縁のせいか、意に反して生き長らえて、別世界に生まれ変わった思いで日々を過ごしていた。自然と心が静まるにつれて、まず母君の御ことが、気がかりで悲しい」と、最後までおっしゃりきらないうちに、（小君は）たいそう悲しくて、「（あなたが）姿を消しておしまいになってしまった後は、（母君は）そのご心痛で気も狂わんばかりで、気がかりな様子でいらっしゃったが、（薫）大将殿からいろいろお慰めになって、（母君は）『私などまでも、にお思いになる（薫大将の）ご配慮のもったいなさに心安まって、（私は）命を取りとめた』と、常々おっしゃるようだ。とはいえ、やはりけて、もとの母君とは違うようにお見えになる。このように（浮舟姉上が存命であると）聞き申し上げたとき、すぐに（母に）申し上げたく思えたが、（薫）大将殿が『しばらくは人に漏らすな』と、繰り返しおっしゃったので、（母上には）申し上げることができずにおります」などと、幼い口調で言って座っている。「それが、たいそう悔しい。決して知られ申し上げたくないと思うのに、どうやって（私のことを）お聞きになったのかと情けないから、（自分は小野の里に）いなかったというふうにそれらしく申し上げてよ」とおっしゃると、（小君は）たいそう難しいと思った。（浮舟が）「ただ、こんな（出家して尼の姿となった）つらい姿であっても、母君には今一度対面し申し上げたいと思う。これをこっそり渡してよ」と言って、几帳のそばから手紙を取り出して、お置きになると、（小君はその手紙を）懐に引き入れて、「さきほどの（薫大将からのお手紙への）ご返事なしでは、（薫大将が）何とおっしゃるだろう。ただ一行でも（お返事を）頂戴して、帰りたいのです」と言うと、（浮舟は）「たいそう嫌なこと（をおっしゃるな）、年月がたつ間に（あなたは）心を変えておしまいになったことよ。こんな情けない（私の）評判を、（私は小野の里に）いないというふうにそれらしく言って、（世間に対し）そっと隠そうとはお思いにならないのか」と不満を言われて、（小君は）無理にも言うことができず、少しうつむいている。（普段の浮舟は）あれほど口数が少なく、（傍らの人が）心配になる（ほどおとなしい）ご性格であるが、幼いときから特別に一緒にいた名残で親密であるのか、小君にだけは本音を少し（言い）続けなさったことは、たいそうしみじみと心を動かされる。

　「今宵はどのようにしてお帰りになるのだろう」などと、いつものように出過ぎる尼たちも気の毒がるので、尼君も「本当に、どうやって（お帰りになるのだろうか）。通いなれた人でも、やはり踏み迷ってしまいそうな山道の険しい道のようですから。今宵だけはお泊まりになりなさいな」と言い出しなさったが、（小君は）「急ぎ帰参せよと（薫大将が）おっしゃったので、どうして泊まることができましょう、いや泊まることはできません。月の光で道がはっきりしないということもないだろう（から）」と言って立つのを、「あんなに、大人びて」と、（尼たちは）皆でいじらしがった。